国労はかた

NO.167

2023.4.3

国鉄労働組合博多地区本部
責任者／穴井憲寿
編集者／教宣部
事務所/博多駅東2-18-28
ジェントリー博多201

入社式前・新入社員対策行動

４月２日１２時５０分より、ＪＲ門司駅前にて新入社員対策行動（国労宣伝活動）が行われ、博多地区本部からは、**香田賢晋（博多車掌区）、川﨑良秋（博多車掌区）、井上喜代彦（南福岡運転区）、森永正則（南福岡運転区）、佐藤康徳（久留米運輸センター）**の５名が参加しました。今年も例年通り門司駅ロータリ前にて、新入社員約８０名に対し、「労働組合の意義」や「オープンショップ制度とは何か」といった必要不可欠な情報を街宣行動という形で伝え、「国労」をアピールしました。今回は、新入社員のみならず、一般の方々にも労働組合の存在を意識して欲しいということで、国労オリジナルのウエットティッシュを駅前の通行人に配り、ほとんどの方が快く受け取ってくれました。本社社員による手際の良い指揮のもと新入社員全員がタクシーに乗り込み、研修センターに向かって行ったところで、宣伝活動は終了しました。その後、国労北九州地区本部事務所に移動し、会議室にて「新賃金制度」の学習会（九州本部主催）が行われ、当制度の問題点と今後の課題について議論を交わしました（写真右）。参加された組合員の皆さん、お疲れ様でした！そして、新入社員の皆さん、入社おめでとうございます！

青年のひとりごと

昨年の冬、島根県松江市にある「小泉八雲記念館」を訪れました。小泉八雲（本名：ラフカディオ・ハーン）はギリシャ生まれの新聞記者、小説家、英文学者であり、日本文化に惹かれて来日し、１８９０年８月、松江にある島根県尋常中学校に英語教師として帰任、士族の娘であった小泉セツと結婚した後、日本に帰化しました。彼の文学者としての代表的な作品である「怪談」は、世代を越えて読み継がれています。私が非常に興味深かったのは、この記念館の展示資料の中に、八雲氏は「教育というのは、単に機械的に事実だけを学ぶのではなく、事実の起こる所以を学ぶことが必要である」と、想像力を働かせることなく記憶力のみを鍛えるような日本の教育の在り方に警鐘を鳴らした、という旨の説明書きがあったことです。ご存知の通り、私たちは、学校教育において、主に試験で点数を取ることを最大の目的とした勉強を強いられ、「何を学べば楽しく生きられるか」といった本来何よりも重要であるはずの「想像力」は、まるで余計なものであるかのように抑圧されます。そのため、私たちが社会に出てからも、人間としての価値は昇進試験等の「点数」によってのみ決まるというのがもはや「常識」となっています。身近な問題として、「労働法」は「道路交通法」と同じくらい守られていないと言われています。労働者である私たちが人間らしく安心して生活するためには、必要不可欠な法律なのですが、率先して学ぼうとする人は極めて少数派であり、それを実践する場であるはずの「労働組合」はひどく軽視されます。「点数」につながらないものは意味がないと。しかし、「他人」の評価軸にしがみつき、自分の「生き方」をはじめとする実存的な問題と向き合うだけの「想像力」を養っていないような状態で、もし、その「採点者」から切り捨てられてしまったら…。八雲氏に限らず、偉大な教育者たちが危惧していたのは、こうしたことなのかもしれません。

○当面する行動

○　４月１０日（月）　１８：３０～/筑紫平和センター役員会　筑紫平和センター
○　４月１２日（水）　１６：００～/県平和フォーラム運営委員会　福岡県教育総研
○　４月１７日（月）　１８：３０～/筑紫平和センター役員会　筑紫平和センター